

## 暴君 第1章

takamiism

ふと顔を上げると、春の匂いがした。

読んでいた本を机に置き、開いている窓を眺める。遠くに、一筋の雲が見えた。

「あと三周！」という声が、窓の下から聞こえた。どの部活かまでは、わからない。

春はどこにあるのか、確かめようと椅子から立ち上がる。その時、後ろで扉の開く音がした。

「あ、先輩、早いですね」

小柄な女子が部室に入ってきた。歩くと、肩までかかる髪が、少しだけ揺れる。

「先輩？」

「えっと、誰だっけ」

「・・・大宮ですけど」

あきれたような声が、返ってきた。

「そろそろ名前ぐらい、覚えてくださいよ」

机を挟んで、斜め前の椅子に座ると、彼女が言った。

「名前ね」

「ええ、名前」

「でも、僕のこと、名前で呼ばないよね」

「先輩は先輩ですから」

「先輩ですか」

「そうです」

「そうですか」

「オウムですか」

「です」

「・・・先輩」

にらまれたので、口を閉じることにした。

「先輩、今は何を読んでいるんです？」

声が聞こえたのは、しばらくしてからだった。彼女も、本を読んでいる。

「え、僕？」

「この部室には、私と先輩しかいないと思うんですけど」

「えっと、これは」

本の表紙を見せようとして、途中で手を止めた。

「このやりとり、前にもしたような」

「あ、それは覚えてるんですね」

「さあ」

「恒例ですね」

「え、幽霊？」

「わざとですね」

「え、いや、僕は」

にらまれたので、残りの言葉を飲み込んだ。

「忘れものは、ないね」

「はい、大丈夫です」

返事を聞いてから、部室の鍵をかける。

薄暗い校舎を、並んで歩いた。

「失礼します」

彼女を廊下に残し、職員室に入る。棚がある奥まで進み、鍵を返した。

棚に一番近い席を見た。座っている背中に、声をかける。

「先生、今日の部活、終わります」

メガネをかけた顔が、振り向いた。

「ああ、そうか。わかった」

低い声で、先生が言った。

「では、帰ります」

「あ、古西」

「はい」

「大宮は？」

「廊下で待ってます。呼びますか」

返事までに、間があった。

「いや、いい。一緒に帰るのか」

「はい、二人とも電車なので。途中の駅までは、一緒です」

「そうか」

「あの、それが何か？」

「いや、お疲れさん」

それだけ言うと、先生は背中を向けた。

校庭を出て、駅に向かう。周囲には、部活帰りの制服姿が多い。

「成上先生、どうでしたか？」

今日は、少し肌寒いようだ。丸い月が、出ていた。

「先輩」

「あ、うん」

「先生、何か言っていました？」

「いや、別に何も」

「そうですか」

「そういえば、先生と話したこと、あったかな」

「ありますよ。入部届を提出する時に。それに、私のクラスの古典は、成上先生です」

「へえ」

「先生、部室に一度も来ないですね」

「うん。僕が一年の時から、一度も」

「読書部の活動に、興味がないんですかね」

「ま、僕たち、何もしてないけど」

「先輩は、先生に興味がないんですかね」

「ないこともないよ」

「今日は、部活は？」

母が尋ねてきたのは、朝、玄関の扉に手をかけた時だった。

「いや、ないよ。だから、早く帰ってくる」

「そうなの」  
「え、何かある？」  
「後輩ができたって、前に言ってたけど」  
「うん、一人だけ」  
「ちゃんとしてるの」  
「ちゃんと？」  
「そう。あんた、弟とか妹、いないから」  
「それは、関係ないんじゃない？」  
「まあ、仲良くするのよ。辞めるって言われないように」  
「いや、部活を続けるかどうかは、相手の問題だから。なるようにしかならない」  
「年寄りみたいなこと、言わないの。ちゃんとね」  
「じゃ、いってきます」

「・・・という会話が行われましたとさ」  
部室に来た彼女に報告をする。  
返事がない。しばらく、お互いの顔を見つめあった。  
「先輩、私より後に来ること、ないですね」  
「ま、先輩だからね」  
「どういう意味です？」  
「いや」  
「ところで、今は、何を読んでいるんです？」  
「うん、今は」  
本の表紙を見せようとして、途中で手を止めた。  
「その前に、僕の話に対して、何かコメントは？」  
「先輩は、私が辞めると思ってるんですか」  
「僕は君じゃないから、わからない」  
「じゃあ、辞めてほしいんですか」  
「お気に召すまま」  
「・・・先輩」  
にらまれた。  
「いや、辞められると、部員はまた僕だけになるからね。それは、困ったことです、はい」  
「弁解ですか」  
「弁明です」  
「何が違うんです？」

チャイムが鳴って、先生が出ていくと、教室が騒がしくなった。  
広げたままの世界史の資料集を眺める。  
「こにさん、休み時間まで勉強ですかいい」  
前の椅子に座りながら、短髪の男子が話しかけてきた。  
「ああ、久保寺君」  
「熱心ですな」  
「人類の歴史を振り返ると、愉快にならない？」  
「現在じゃなく、過去に興味がある、と」  
「どういう意味？」  
「同級生と交流を深めたりはしない、と」

そう言って、久保寺君は笑う。  
「まあ、誰も話しかけてこないからね」  
「こにさん、待ってちゃ駄目だよ。こっちから、行かないと」  
「待ち合わせをした覚えはないけど」  
教室を眺めた。あちこちに、群れがある。  
「ここは、サバンナなんだね」  
「え？」  
「僕は、もう少し寒い場所にいることにしよう」  
「こにさん、相変わらずですな」  
久保寺君が立ち上がる。  
「久保寺君が、僕に話しかけるのは、どうして？」  
「出てるんだな、こにさんから」  
「え、くさい？」  
「いや、オーラが」  
「オーラ？」  
「そう、オーラ」

「僕からオーラが出ている、そんな説が提唱されているんだけど」  
彼女はちょうど、斜め前の椅子に座るところだった。  
「どうかな」  
「それ、先輩の自称ですか」  
「いや、同じクラスの人が」  
「先輩は、自分でどう思ってるんです？」  
「いや、何も」  
「自分のこと、わからないんですか」  
「自分なんてものは、自分から一番遠いところにあるからね」  
返事がなかった。彼女は、眉間にしわを寄せている。  
「もう一度言うけど、どうかな」  
「オーラが出てるかはともかく、変わってますよね」  
「え、僕が？」  
「はい、先輩が」  
「みんな、それぞれ、変わっているよ」  
「そういうことを言うところが、変わってます」  
「他人に、変わってると連呼する人も、かなり変わっているよね」  
「・・・先輩」  
にらまれたので、話を切り上げた。

昼食の後、トイレに向かった。  
洗面台の周囲に、数人の男子がいる。鏡を見ながら、髪の毛をしきりにいじっている。  
それを横目に、洗面台の一つで口をゆすぐ。最後に、うがいも忘れない。  
顔を上げると、鏡に映る男子たちと目が合った。  
ハンカチで手をふきながら、洗面台を離れた。

「若者は、髪を気にするよね」

手元の本から、彼女が視線を上げた。  
「若者？」  
「髪型に自分の神経を尖らせています、みたいな」  
「まあ、多少はあると思いますけど。誰だって」  
「ふーん」  
「先輩も若者ですよ」  
「僕は、髪が短いから」  
「長さは関係ないと思います」  
「一応、気にするの？」  
「私ですか。まあ、身だしなみの一つですよ」  
「女の子だね」  
「性別は関係ないと思います」  
　　そう言って、じっと見つめてくる。  
「え、何か」  
「先輩が、私のことを質問するのは、初めてですね」  
「そうだっけ」  
「どうしたんです、急に」  
「僕は僕だけだね」  
「よくわかりませんが」  
　　にらまれた。

「おい、古西」  
　　休み時間になり、教室から出たところだった。  
　　振り向くと、先生が歩いてくる。  
「あ、成上先生」  
「放課後、部室に行くか」  
「はい、行きます」  
「部屋の隅に、段ボール箱がいくつか、積んであるよな」  
「そう、でしたっけ？」  
「あれ、中身を確認しておいてくれるか」  
「わかりました」  
「急ぎじゃないからな。終わったら、報告してくれるか」  
「了解です」  
「よろしく」

　　休み時間になっても、生物の資料集を見ていた。  
「ここにさん、お客さんですぜ」  
　　少し遠くから声がした。  
　　見回すと、入口に近い席に、数人の男子が集まっていた。その中に、久保寺君の姿があった。  
　　入口を指さしている。  
　　見ると、小柄な女子が立っていた。  
　　彼女だ。こちらを見ている。  
　　資料集を閉じて、立ち上がった。

廊下の端に移動した。

「あの、すみません、先輩」

「いや、大丈夫」

会話が途切れた。休み時間の喧騒に包まれる。

「えっと、どうしたの」

「あ、古典の授業のあと、成上先生に呼ばれたんです。それで、部室にある箱の整理をしてくれっ  
て」

「ああ、それなら、僕もついさっき、先生から頼まれたよ」

「え、そうなんですか」

「僕、嘘ついたこと、ないよ」

「それは嘘ですよ」

にらまれなかった。

「あれ」

「え、何ですか」

「身構えたのに」

「だから、何の話です？」

「いや、いいです」

また、会話が途切れる。

「私の話は、それだけです」

「わざわざ、どうもね」

「失礼します」

彼女は、少し頭を下げた。

教室に戻る。入口の近くの集団が、いなくなっていた。

自分の席に座って、現代文の教科書とノートを用意する。

「こにさん、こにさんや」

そう言いながら、久保寺君が近付いてくる。

「ああ、さっきは、ありがとう」

「いえいえ。で、あれ、誰」

「誰って」

「あの小さい女子ですよ」

「怒られると思うよ」

「古西先輩はいますかって言ってたけど、こにさん、もしかして」

「後輩だよ」

「え？」

「部活の」

「読書部って、たしか、部員はこにさんだけの」

「新入部員、第一号だね」

「もっと早く教えてよ」

「え、どうして」

「名前、何て言うの」

「えっと」

「こにさん、知らないとかは、なしよ」

「たしか、大宮さん」

「大宮さん」

「気になるの？」

久保寺君が、何も言わずに、息を吐いた。

「え、何？」

「だって、もの凄くかわいいじゃん」

「ほう」

「お人形さんみたい」

「それはまた」

「こにさんは、どうとも思わないの」

「人間に見えるけどね」

職員室に行くと、棚に鍵がなかった。

一番近い席を見る。先生の姿もなかった。

職員室を出て、部室に向かう。

扉を開けると、部屋の隅に、大宮さんが立っていた。背中を向けている。

「今日は、僕よりも早かったね」

背中が振り向く。

「あ、先輩、お疲れさまです」

「いや、疲れてないよ」

「でしょうね」

大宮さんをにらんでみた。にらみ返された。

「えっと、それが、例の箱だね」

部屋の隅を見た。段ボール箱が四個、積まれている。

「中身を確認するんでしたよね」

「とりあえず、一番上から開けてみよう」

箱を一つ下ろして、机に置いた。

「あれ、軽いな」

ガムテープをはがして、中をのぞく。

「ノートだね」

「あ、先輩、こういうものもありますよ」

大宮さんが薄い冊子を取り出す。緑色の表紙に、黒字で「読書報告」と書かれている。

「こっちのノートにも、同じことが書いてあるね」

ノートを取り出して、大宮さんに渡した。「読書報告」の文字は、赤字で書かれている。

ノートの下冊子を取り出して、めくる。

「えっと、日付に本の種類、短い感想が書いてある」

「読んだ部員の名前もありますね。このノートも、同じやり方みたいです」

「われらが読書部の遺産だね」

大宮さんが、ノートから顔を上げた。

「そういえば、なんですけど」

「はい、何なりと」

「この部、いつからあるんでしょう。古いんですか？」

「うーん、聞いたことないな」

「ですよ」

「え」

「私が入部するまでは、先輩しかいなかったんですから」

「ああ、まあ」

「これ、どうします？」

「残りの箱の確認をしたら、先生に聞いてみよう」

「他の段ボール箱も、今から確認しますか？」

「いや、今日は、もういいと思う」

「いいんですか？」

「歴史は、どこにも逃げないからね」

「よくわからない言い訳ですね」